

歯科金属アレルギー

唾液通じて血液に全身に症状



同じ金属に繰り返し触れると、汗や唾液で溶け出した金属イオンが体内に入り込む。これがたんぱく質と結びつき、異物とみなされるとアレルギーの原因となる。

最近注目されているのが、歯科の治療で使う金属が原因となる「歯科金属アレルギー」だ。

「皮膚科などでいくら治療しても治らない歯痛や、症状が出る前に集中的に歯科治療を行った場合、歯科金属アレルギーが疑われます」と、東京医科歯科大臨床教授で、松村歯科医院（東京都）の松村光明院長は話す。

歯科用合金には、ニッケルやクロム、コバルトなど、アレルギー

を起こしやすい金属が使われていて、歯の詰め物などに含まれる金属が唾液を通じて血液に流れ込むと、全身に症状が出る。



金属に接している部分が赤み・炎症する口内炎のほか、口の中や皮膚に細かい目立たない斑点ができる扁平苔癬、手のひらや足の裏にうみを持った水泡状の湿疹がでる、その後、ポロポロと皮がむけられる掌蹼腫瘍症、手足に小さい水ぶくれが出来て、かゆみがある異汗性湿疹などがあがる。

歯科金属アレルギーが疑われる場合、金属パッチテストを受け

る。日本歯科大皮膚科学会の山口全一教授によると、背中や腕の内側に、原因として疑われる約20種類の金属の試薬を含んだばんそうこうをはりつけ、そのままだけ1週間過ごす。ばんそうこうをはがし、1時間後、1日後、2日後、1週間後にそれぞれ、アレルギー反応が出ているかどうかを調べる。この結果や症状をもとに、アレルギーの診断が歯科にあるかどうかを判断する。原因として強く疑われた場合、過去のカルテなどで該当する金属が使われているかどうかを確認する。

陽性反応が出た金属が含まれていた場合は、治療で使った金属を取り除き、代わりにセラミックやプラスチックなど、金属が含まれていない材料と交換する。インプラント（人工歯根）には、アレルギーを起こしにくいチタンが使われているため、症状が出る場合はほとんどないという。



もともと金属アレルギーが出やすい人は、歯科治療の際に初めてから金属を使わないという選択肢もある。山口さんは「日本メタルフリー歯科臨床学会のウェブサイト (<http://metalallergy.net/>) には、学会所属の歯科医らの名前が載っているので、参考にしてください」と話す。

春を迎え、汗ばむことが増えてきた。時計やアクセサリーなどで、金属が原因で赤みや発疹が出る金属アレルギーは、汗が原因となりやすい。しかし直接金属に触れていない部分にも、歯の詰め物などの金属が原因で全身に症状が出る場合もあり、注意が必要だ。

The Asahi Shimbun

もしかして、歯科金属アレルギー？

- ① 口内炎がなかなか治らない
- ② 歯茎が炎症を起こしている
- ③ 小さい赤や紫色の湿疹が手首の内側や足などにできる
- ④ 口の中がただれたり、皮膚がうろこ状にかさついたりする
- ⑤ うみがたまった水泡が手のひらや足の裏にたくさんできる
- ⑥ 鎖骨や胸の中央の関節が痛くなる
- ⑦ 手のひらや指、足の指などに水泡が出る

ドクター松村の診断



①②は金属が直接触れることにより起きているのかもしれない。③④は扁平苔癬の可能性があり、⑤⑥は掌蹼腫瘍症が疑われます。足の湿疹は水虫に似ているため、角層を取って顕微鏡で調べ、水虫を起こす菌がいるかを調べる必要があります。⑦は異汗性湿疹の可能性があり、掌蹼腫瘍症と異なり、水泡にうみはたまりません